

主 文

本件上告を棄却する。

理 由

弁護人堤牧太の上告趣意第一点は「原判決には理由不備の違法ありと信ずる。即ち原判決は其主文に於て「被告人を懲役十年に処する。当審に於ける未決勾留日数百二十日を右本刑に算入する。原審並当審に於ける訴訟費用は全部被告人の負担とする。」と言渡した、然るに原判決理由の部には「法律に照すと、被告人の判示所為は刑法第二百三十八条第二百四十条前段に該当するので、所定刑中有期懲役刑を選択して処断すべきだが、被告人には前示の如き前科があるので、刑法第五十六条第五十七条に則り、同法第十四条の制限内で再犯の加重をなした刑期範囲内で、被告人を懲役十年に処し、尚原審並に当審に於ける訴訟費用は刑事訴訟法第二百三十七条に則つて全部被告人に負担させることゝした。以上の次第で主文の様に判決する」と説示しあるに止まり、同しく主文に掲げられたる未決勾留日数中百二十日通算の点に付ては果して如何なる理由と如何なる法令の規定に基き言渡したのが毫末もその理由が示されて居ない。そこで原判決には理由不備があつて、此点に於て原判決は破毀を免かれないものと信する（大審院昭和八年（れ）第三八七号事件、昭和八年五月三十一日第三刑事部判決参照）」というにある。

しかし、原判決を見ると、所論の未決勾留日数通算の点に関しては、「刑法第二十一条を適用し当審に於ける未決勾留日数百二十日を右本刑に算入する」旨説示されてあるばかりでなく、未決勾留日数の通算は、裁判所の自由裁量に属するところであるから、原審が前記のように説示しただけで、何故に百二十日通算するのを相当とするかの理由を詳細に説明しなかつたからというて、これをもつて直ちに理由不備の違法あるものと為すことはできない。論旨は理由がない。

同上告趣意第二点は「原判決は其理由として「被告人は終戦以来定職なく、知り

合ひの朝鮮人と共に食糧品日用品等の闇ブローカーをして居たものであるが、昭和二十一年六月十六日午後十一時半頃、窃盗の目的で、宮崎市 a b 丁目 A 組合事務室の西側硝子窓を開いて、同室内に忍び入り、燐寸を点して、目的物を物色中、当時度々盗難に遭つた為、偶々同夜予め右事務室内に張り込んで警戒して居た前記組合常務理事 B の発見するところとなり、同人から訓練用木製薙刀（証第十三号）で前頭部を強打され、更に組み付かれたが之を振離して前記窓口から戸外に逃げ出たところ、右 B と同様、同夜右事務室向い側の自宅へ警戒中の同組合理事 C から組み付かれ、同事務所前の路上で取り押えられようとしたので、逮捕を免かれる為、右 C に対し、咬み付く等の暴行を加え、其の為同人の右肘関節外側部等に治療二週間を要する咬傷等の傷害を加えたものである」と認定し、之を準強盗傷人として懲役十年に処して居る。而して右事実中被告人が判示の頃、判示組合事務所の横の地上で B、C 等から取押えられ且自ら顔面に打撲症を受け、又 C の肘に噛付き負傷せしめたことは被告人に於て認めて居るが、被告人が窃盗の目的を以て事務室に侵入して打たれて、組付かれ西側窓口から飛出して逃走せんと企てたと言う点は被告人は本件検挙以来原審公判の最終に至るまで否認し続けて居ることは記録上明かであつて、原判決は右判示事実認定の資料として、B、C 両名に対する第一、二審の証人訊問調書、予審第一審に於ける各検証調書等を引用して居るが、若し右 B 及 C の各証言が真実で少しの相違も誇張もないとすれば、原判決の認定は妥当であると断して差支あるまいか、（１）証人 B の第一、二審に於ける供述に付て（イ）事務室内に於て訓練用木製薙刀で被告人を強打したと言うのはどうであらうか、同証人供述の様に右薙刀が一打ちで二つに折れる程強打した上之に組み付きしに被告人が振切つて逃げ出し西側の窓から外部に飛出したものとすれば第一審証人 D の証言により認めらるゝ被告人の左額から頭髮の生え際にかけて約六糎位の長さの打撲傷があるので相当の血痕が室内各所は勿論組み付いて振切られた B の着衣等にも付いて居るべき

ものと認めるのが条理上当然ではあるまいか、由来頭部から上方の傷は出血が夥しいことは医家の意見を徴する迄もなく一般人の常識とするところである。然るに本件記録上血痕のことは原審のBの訊問までも少しも表はれて居ない。原審証人Bの証言でも被告人が飛び出したと言ふ西側の窓際に積み重ねあつたイリコ入りの袋の上に僅か血痕があつたのを見たのみで他には気付かなんだと言ふ程度で、而かも此血痕のことは弁護士より検証及証人訊問申請の理由として申立てたことあつて原審検証の現場で訊問を受けた同証人が如何なる経緯から血痕のことを申立てたのか夫れに立会はなかつた当弁護士には判らないか、若し血痕があつたとすれば予審並原審の証人訊問に於て申立つべき機会は多かつたことゝ思はれるのに一言の之に及ぶものなかりしは如何、又事件発生直後警察官が現場を見た（原審証人Cの供述）としたり血痕を見逃かす筈はあるまいか、実況見分書さへ作つた形跡のない本件では、血痕の存在事實は認むるに由ないことゝ言はねばならぬ、尚仮りにBがイリコ入りの袋に僅少でも血痕あるを認めたとしたら大事な証拠として保存せねばなるまい、被告人が事務室に入つて叩かれたことはないと検挙当初より主張する以上血痕のことが第二審の証拠調の申請迄不問に付せられて居たことは単に調査の不十分とのみ片付けらるへきてはあるまい、寧ろB証人の第二審に於ける血痕付着の証言は事務室内で打撲したと言ふ自己の供述を裏付けんと試みた工作ではあるまいか。（ロ）判示の頃降雨中であつたこと、被告人が取押へられた附近に下駄かなかつたことは本件記録上明かである（被告人は下駄を穿ち居りしと弁明す）若し跣足であつたとすれば、乗り越えたと認められて居る窓の敷居や、室内の板張りに相当の足痕が付着して居るものと認めるのか条理の命するところではあるまいか、然るにBの第二審の証言によれば窓には気付かぬ、板張に僅かに足痕を認めた、又西側の窓際の下の方のイリコ入り袋の上に外方に向いた足痕が一つあつたと言ふのみである。（ハ）当夜事務室内に警戒中「コトツ」と聞へ次でコトンコトンと二回音がしたので、初め

は鼠か猫と思つたが云々とあるが深夜神経を尖らして警戒し居たBが聞いたと言ふ右程度位の物音で内側から栓を入れて戸締りしてあつた西側の窓の硝子が取外されるのであらうか、之れも一つの疑問で、(二) B名義昭和二十一年六月十七日附事実申立書(記録二九丁)には「云々警戒中十一時四十分頃硝子戸ノ方ガコトコト二回音シフライパンノ落チタ音ガシタンデ特ニ氣ヲ付ケテ居ニマスト倉庫内ニ侵入燐寸ヲスリマシタノデ直チニ飛ヒ掛ルト同時ニC理事ヲ大声ニテ呼ヒマシタトコロ泥棒ハ必死トナツテ私ヲ振ハナシ侵入シタ場所カラ飛ヒ出シテ逃走セントシマシタカC理事カ飛ヒ掛リ相協力大格闘ノ上遂ニ逮捕云々」と記載され事務室内で薙刀で賊を撲つたことは少しも記載してないのは何故であらうか、Bは当初から、ありのまゝのことを申立つる人ならば被告人を殴つたことを何故書かなかつたであらうか、若し逮捕後に被告人の顔面の傷を見て自己の責任を感じて申立書に書かなかつたものとせば、此人は自己の都合のためを思へば事実をそのまゝ書き又は申立つる事を敢てせぬ人と断しても差支へなからう、左すれば此の証言乃至申立書を無条件で受入るゝことは危険千万であると言はねばなるまい。(2) 証人Cの第一、二審の供述を通して同証人の証言がBの証言と一致している事は怪しむに足らないからBの証言にして措信し難い点がありとすればCの証言の信憑力に付ても相当の検討を必要とするであらふ此Cも血痕のことは第二審に至り弁護人から「いりこの袋に血が付いていたのを見たか」と問はれ始めて「その晩には気付きませんでした但翌日見た時気附きました」と供述せしのみで、夫れまでは曾て此の点に付て証言せさりしことは本件記録上明白である、而して更に弁護人から問はれて「私は当時此の事件が左程問題にならうとは思ひませんでしたので左様なこと(血痕附着のイリコ袋を証拠品として保存し置くこと)迄は気付きませんでした」供述して居るか屢組合事務所に盗難ありて、その前夜も組合が盗難に罹つたので当夜は特にBと二人で内外から警戒し合ひ居りしところに偶々本件が起り、Cは賊に組付き格闘の際肘を咬み

付かれて治療二週間を要する創傷を負ふて居るから、相当深刻に考へらるべき事件であるから右の供述は自己の責任免れの供述か、又は血痕付着のことはBが訊問を受けて供述したので之に符合せしむる意図の下になされたものではあるまいか、（3）本件発生の前後に亘り組合が盗難に罹りしことは記録上明白で殊にBの第二審の証言（第五十二、五十三問答）によれば本件前の数回の盗難の場合に於ける賊の手口は何時も異つて居たこと並本件後にも一度盗難にかゝつたことが認められる点から見れば被告人以外に組合に侵入した賊があつたことは想像して差支へなからう、従つて被告人方搜索の未発見されたイリコや鍋をBが自分の組合以外にない品であると証言して居る点も容易に信用し得ないであらう。以上の如く、B、Cの各証言の信憑力が疑はれて来れば、その後に考へられることは、B、Cは前来度々の盗難、就中本件前夜の盗難に付て自分等の職責上責任を感じ判示の夜Bは護身用として判示の薙刀を携へ組合事務室の周囲を巡視中偶被告人かその弁解する様に判示組合事務所の横を通行中暗夜のことで何かに躓き倒れた際Bは畢定賊なりと早合点して所携の薙刀で殴打してCに知らせたので、被告人は驚き、若し賊と誤解されたら前科多く、而かもその前年宮崎署に窃盗の嫌疑で留置され、空襲のため一時帰宅を許されたか、その後出頭せなかつた弱点があるのでそのまゝ引致されるは其頃結婚した許りの内縁の妻Eに前科者と判り逃げられてはと考えるべくその場を遁れんと考へて逃げ出したのでB、Cは之を追ふて被告人を逮捕して警官に引渡したか、被告人の顔面の創を見て、自己の所為を理由付けんと欲して室内に侵入したやうに装ひ、始めは殴打のことは秘して居りしも事件の取調が進んだので室内で殴り格闘の末賊か窓から逃出したのでCと協力して之を逮捕したやうに申立てたのではあるまいか、一旦室内に侵入した賊を殴打したと申立てた以上取調の進むに従ひ始めの供述の維持に力めんとするに人情の已むないところであらふ、斯く論じ来れば右B、Cの原判決引用の証言は条理上措信の価値なきやうに思はれるのに原審は易々之を

信用し、之を主な資料として前判示の如き事実を認定したのは結局採証の法則に違反し証拠価値のない証拠に基いて事実を認定した違法あるに帰し、原判決は此の一点に於ても破毀を免れないものと信ずる、少くとも本件の証拠関係に於て被告人に原判決のやうな犯行ありと認めることは客觀的に非常な危険ありと信せらるゝから再審理の機会を与へらるゝやう原判決を破毀して頂くため之れも上告理由の一点として訴へたのである」といふ弁護士江川甚一郎の上告趣意は「先前提として申上げたい日本国憲法の施行に伴う刑事訴訟法の應急的措置に関する法律に依り刑事訴訟法第四百十二条第四百十四条即ち顯著なる量刑の不当重大なる事実の誤認を上告の理由とすることが出来ると言ふ規定は廃止せられたのであるか、それは二審裁判所をして慎重に公正に社会常識を活用して事実の認定刑の量定に不当なからしむるの見地から出たものであつて実験則から見て証拠引用が不当である場合之を上告の理由とすることを禁止するものでないこと勿論であると信ずる今本件の記録を見ると本件の事實は昭和二十一年六月十六日の出来事である而かも即時の発覚であるのに之が検事局に送致せられたのは同年の九月六日で正に八十数日後である、而して其間強盜傷人事件としての取扱は少しもされて居らない、即ち実地の見分や検証の事は何もしてないのである報告も検事局にしてないのである唯してあるのは被告人の家宅搜索（非公式の）と家宅にあつた衣料品に付大阪辺りまで照会したに過ぎない、苟くも捜査に携はるものである以上捜査記録に表はれて居る通りの事實があつたものとしたら強盜傷人なる重大事案と思はないものはなからう、然るに其取扱がしてない。何を物語るものであるか強盜傷人の基礎をなす窃盜の家宅侵入の事實がなかつた為ではないか、捜査官憲の怠慢とか捜査の不完全とか言ふことを以て納りを付けることは出来ない家宅侵入の事實がなかつたのであると疑ふ余地はないものと思へる他面原判決に引用した原審証人B、Cは被害者組合の理事である原判決に引用した両人の証言中にある通り同組合は数回盜難に逢ひ犯人不明な状態にあつた

ので兩人としてはどうしても犯人を捕へなければ責任が果されない立場にあつたのである換言すれば捕へることに必要を痛感して居つたのである殊に被告人には傷を与へて居るのである家宅内に侵入して来たと言はなければ傷けたことを正当化することが出来ない兩人である。それに原判決に引用したBの証言中にある訓練用の棒薙刀は組合の事務室にあつたと言ふのであるが、終戦後殆んど一ケ年を経過した頃事務室にあつたとは受取りがたい又事務室の板張には素足で歩いた程度のものが僅かに見へたイリコの這入つた袋にも血もついて居つたと言ふのであるが之は警察や検事局や予審や一審公判では表はれなかつた事実である棒薙刀のことは検事調べのとき始めて言ひ出したのである。尚原審証人Cもイリコの袋に足跡らしいものと血痕が附着しているのに気付いたと言ふし居るのである之もB同様原審で始めて言ふのである、而して之が家宅に侵入した証拠になつているのである措信価値の問題ではない客觀的見地からは社会常識に訴へ引用することを許されない証言であると信ずる確かに実験則の違反であると信ずる。敢て上告の理由となし原判決の破毀を求める」というにある。

しかし、原判決は、その引用に係る各証拠を綜合して所論の事実を認定したものであつて、この認定は、その基礎とされた各証拠を綜合するにおいて之を肯定するに十分である。論旨は或は本件検挙当初の手續経過に徴し家宅侵入の事実の疑ふべき所以を論じ、或は証人B並びに同Cの各証言の証拠価値なき所以を縷々論述するのであるが、仮りに所論の如き事情があつたとしても、必ずしも右証言の信憑力を皆無ならしめないばかりでなく、右証言のほか、検証の結果、その他の証拠をも斟酌してなされた原審の事実認定を妨ぐるに足りない。論旨は、いずれも結局原審の専権に属する証拠の取捨若しくは事実認定を論難するに帰着し、上告適法の理由とならない。

よつて、刑事訴訟法第四百四十六条に則り主文の通り判決する。

この判決は裁判官全員の一致した意見である。

検察官幸節静彦関与

昭和二十二年十二月十五日

最高裁判所第一小法廷

裁判長裁判官	岩	松	三	郎
--------	---	---	---	---

裁判官	沢	田	竹	治郎
-----	---	---	---	----

裁判官	真	野		毅
-----	---	---	--	---

裁判官	斎	藤	悠	輔
-----	---	---	---	---